

社会問題に取り組む社会学



2010 年度上村ゼミ論文集

名古屋大学文学部社会学研究室

はしがき

夏の卒論中間報告会で4年生の報告に難癖をつけていたら、翌日2年生から「社会学の研究は難しいと感じました」というメールをもらった。確かに簡単ではない。われわれプロの研究者にも簡単ではないのだから。

しかし、実際以上に難しく感じるのは、高校時代までにやってきた勉強と種類が違うからかもしれない。美術に喩えると、高校までの勉強は教室でお手本の下絵を写すようなものだったのである。一方、大学の研究では、写生会に出かけて、対象や構図や技法を自分で決めて絵を描かなければならない。上手下手には個人差があるが、とにかくまず自分で何をどう描くかを決めなければ研究は始まらない。

教室でお手本を写すのは苦手でも、写生会ではさっさと構図を決めて描き始める人もいる。その逆の人もいるだろう。それと同じで、勉強能力と研究能力は全く別物なのである。そう考えると、研究のほうが難しいというのは思い込みであることがわかる。研究には写生会で座る場所を決める時のようなちょっとした勇気が必要だが、始めてしまえば教室で下絵を写すよりずっと楽しい。

自分オリジナルの絵を描くには、対象だけでなく構図や技法も考える必要がある。その際ヒントになるのは、他人の作品の構図や技法である。初心者は画家の絵を見て「ひまわりの絵だ」と思うだけだが、だんだん目が肥えてくると構図や技法の工夫もわかるようになる。講義を聴いたり本を読んだりする際にも、話の内容だけでなく、講師や著者がどんな構図や技法をとっているかに注目してほしい。

なお、写生会方式の教育で誰でも名画が描けるようになるほど世の中は甘くない。しかし、お手本方式を続ける限り、オリジナルな名画が生まれる可能性は絶無である。一方、写生会方式では、仮に名画は描けなくても、自力で絵を描く力は育つ。諸君が卒業後に求められるのは、上手下手はともかく、自力で絵を描く力である。

2011年4月21日

上村 泰裕

目次

【学年末論文】

- 企業の求める人材像——メディアがもたらすミスマッチ構造 (後藤泰紀) 1
- 日本人男性とアジア人女性の国際結婚——先行研究から見る現状と課題 (富田茉実) 15
- 老人クラブはどうあるべきか
——ソーシャル・キャピタル概念を用いた分析から (橋本望希) 28
- 在宅介護サービスと家族——ショートステイの利用に注目して (鈴木美華) 44
- いじめはいかにして発生するか——スクールカースト概念を用いた分析 (石田大祐) 59
- 若年労働者の職場環境——アパレル販売員を事例に (尾崎史織) 77
- 遺伝子組換え食品に関する報道傾向とその影響 (近藤文香) 88

【卒業論文】

- フリーマーケットに集う人々 (根本さやか) 97
- 観光イベントにおけるボランティア動員——遷都 1300 年祭を事例に (梅原愛美) 157

社会問題に取り組む社会学
2010年度上村ゼミ論文集

2011年5月20日 印刷・発行
名古屋大学文学部社会学研究室
464-8601 名古屋市千種区不老町780
e-mail kamimura@lit.nagoya-u.ac.jp